

## 論文

## 再構築される歴史とプラナカン概念 —プラナカンとは誰のことなのか—

安里陽子

## I はじめに

本稿は、シンガポールにおけるプラナカンという概念がいかに関史的あるいは社会的に構築されてきたものであるかを議論するものである。プラナカン(Peranakan)とは、「シンガポール、マレーシアにおいては基本的に、15世紀以来マラッカ、その後ペナンやシンガポールで西洋人との交易に従事してきた華人とマレー人との間に生まれた子孫を指す」<sup>1</sup>といわれ、海峡華人(Straits Chinese)やババ(Baba、男性)、ニョニャ(Nyonya、女性)とも称される。あるいは、文化的なアイデンティティを持つ共同体であり、混血性、異種混雑性といった概念が含有されていると一般的には理解されている。

しかしシンガポールにおけるプラナカンはそれだけの存在なのではない。イギリスの海峡植民地時代には、英国臣民という立場を主張、海峡華人として植民地政府に忠誠を尽くす存在であったが、植民地支配から脱し独立国家となる中では脱政治化した存在となり、グローバル化した現在においては文化的な面を主張しながらも政治性を併せ含む存在として、これまでにさまざまなプラナカン概念を構築してきたといえる。換言すると、プラナカンはシンガポールにおいてつねに歴史を再構築しながら、主体を再構築している存在なのである。それはプラナカンがもともと国民国家という枠組みにはおさまらない存在であり、植民地政府やシンガポール政府が住民をエスニック・グループ別に分類して統治する際、つねにそこからはみ出してしまうことに起因すると考えられる。

イギリスの海峡植民地時代から現在に至るまで、社会の主流派として位置づけられることのなかったプラナカンは、グローバル化の中でその文化に注目が集まり言及されるようになった。シンガポールにおいてプラナカン概念はどのように再構築されてきたのか、海峡植民地時代からシンガポール・プラナカン協会の活動が活発化する1990年代を中心に、グローバル・シティ<sup>2</sup>化した現在においても考えてみたい。本稿は、プラナカンが浮かび上がる契機に着目し、プラナカン概念の変遷から、シンガポールにおける植民地主義、脱植民地化の歴史を描き直

す試みでもある。

以下、本稿の概略を述べる。まずⅡでは、プラナカンという概念がどのように立ち現れてきたのかを、シンガポールが海峡植民地であった時代を中心に考察する。Ⅲでは、日本軍占領時代から抑圧されてきたプラナカンが、長い沈黙期間を経て1990年代に再びシンガポール社会において共同体意識を高めていくまでを、プラナカン性の再構築という観点から議論する。

## Ⅱ 植民地化と海峡華人

### 1 シンガポールにおけるプラナカン概念

本章では、プラナカン概念がどのようにして立ち現れるようになったのかを考察し、海峡植民地時代におけるシンガポールの政治的、社会的状況について、プラナカンを通して描いてみたい。プラナカンとは一つのエスニック・グループという存在ではないうえ、さまざまな解釈がありきっちりと定義づけられるものではないが、それがいかに歴史的あるいは社会的に構築されてきたものであるかを論じるため、まずは土台となる議論を整理しておく。

プラナカンとは「子ども (anak)」を意味するマレー語やインドネシア語から派生した語であり、地元の人と外国人とのインターマリッジによる子孫を指すとされる<sup>3</sup>。東南アジアは中国南部の海港と7～8世紀から交易関係にあったが、14世紀末に誕生したマラッカ王国は1世紀以上にわたり交易の中心として繁栄し、華人商人をはじめ多様な人々が居住するコスモポリタンな都市国家となった<sup>4</sup>。中国から東南アジアへ移住した人々も多く、やがて現地化した彼らとその子孫が、プラナカンあるいは華人系プラナカン (Peranakan Chinese) と呼ばれる存在となっていく<sup>5</sup>。プラナカンと呼ばれるのは、外国人男性と地元の女性とのインターマリッジによる子孫であり、必ずしも華人系であるとは限らずアラブ系プラナカン、インド系プラナカンなどさまざまなパターンが存在し、現地の人と外国の人との混血による子孫という意味において、プラナカンはシンガポールやマレーシア、インドネシアに限らずフィリピンやタイにも見られる現象でもある。ちなみにマレー社会のプラナカンは華人系が多く、プラナカンといえば一般的に華人系プラナカンを指す。

マラッカは王国滅亡後、1641年にはオランダ東インド会社に獲得されることとなった。1824年には英蘭条約によりオランダがイギリスへマラッカを割譲、マラッカ海峡を境に東をイギリス、西をオランダが領有することになり、マレー半島は以後英領マラヤと呼ばれることとなる。イギリス東インド会社は、東南ア

ジア進出の最初の拠点としてペナンに港を建設、やがて移民が集まり交易都市となったが、よりよい拠点を求め1819年にシンガポールに港を開いた。そして1826年、イギリス東インド会社はペナン・マラッカ・シンガポールを海峡植民地とし、シンガポールはその拠点となった。シンガポールは周辺からさらに移民を吸収し、華人移民の数も急激に増加していくこととなる<sup>6</sup>。

先述したように、マラッカには海峡植民地となるはるか以前から華人が居住しており、その子孫がババ・ニョニヤあるいはプラナカンと呼ばれるグループを形成するようになったといわれる<sup>7</sup>。マラッカのプラナカンは「移民後の長い歴史のなかで、中国とのつながりを失い、マレー語と福建語の混合した独特の言語（ババ・マレー語）を話し、衣食住の全般にわたってクレオール化した<sup>8</sup>」といわれ、これらの特徴はプラナカンとそうではない華人系とを区別する標識になっている。では、プラナカンと華人系はどのような契機において互いを差異化し、区別するようになったのであろうか。

マラッカに同化した華人たちが、自らと他の華人とを異なる存在として認識するようになったのは、19世紀になって中国から大量の労働移民がやってきたことに起因するといわれる。当時ババと呼ばれるグループは、海峡植民地において裕福な商人や実業家となっていたほか植民地エリート層として活躍するなど、地位や名声を確立した存在となっており、マラヤ諸州における鉱山やゴム農園の労働者としてやって来た「新客 (sinkkeh)」あるいは新移民と呼ばれた中国人との違いを意識するようになったとされる<sup>9</sup>。そして、現地生まれの華人系であるババと、中国生まれの新客とを区別するようになったことから両者の間に境界が形成され、さらには同じ現地生まれでも、ババとババではない華人系との間にも互いを区別する意識が広がっていったとされている<sup>10</sup>。

タンによると、マラッカに同化した華人 (acculturated Chinese in Melaka) が自らを他の華人 ('pure' Chinese) と区別するようになったのにはいくつかの要因があり、19世紀になって中国からの労働移民が増加したこと、海峡植民地における突出した商人層としての「ババ」ビジネスマンが現れたこと、「ババ」エリートがイギリスの支配下で政治的な役割を担うようになったことなどが挙げられる<sup>11</sup>とする。ここにおいて、ババという語には海峡植民地における実業家やエリート層といった地位や立場、また言語、宗教、服装、食習慣などにおいて中国のそれらとは異なっていることといった標識が含まれており、ババという語が階級やアイデンティティ、文化的な側面において華人系の中のある特殊なグループを指していることがわかる。

海峡華人、ババ・ニョニヤ、プラナカンという語の相違点については、以下のような指摘もある。スリヤディナタによると、華人系プラナカンという語に対し、

ババという語は言語や食習慣、服装など文化的な特徴を共有する、華人系の中でもある特定の集団を指し、しかもそういった特徴は現在失われつつあるものであるとしている<sup>12</sup>。さらに、シンガポールとマレーシアの華人系プラナカンの中には、プラナカンよりもババ・ニュニャと呼ばれたいと主張する人々があり、それはプラナカンという語が文化的な特徴を無視して「現地生まれの華人」まで含んでしまうような大雑把な概念であるからとしている<sup>13</sup>。スリヤディナタの指摘やプラナカン自身の意識においてババという語は海峡華人やプラナカンという語と比べると文化的な特徴に焦点を当てたものであるということができ、さらにプラナカンは海峡華人と比べてもより大きな概念であるといえる。

加えて、マレー社会においてはババあるいはプラナカン側が自らを他の華人系と区別する以前に、マレー人の側が、マレー社会に同化した華人を「プラナカン・チナ (Peranakan Cina)」と呼び、中国生まれの華人とを区別していたともいわれる<sup>14</sup>。ここで注目しておきたいことは、マラッカにおいてはまずマジョリティであるマレー人の側が、マレー社会に同化した華人と中国生まれの華人とを区別していたことであり、プラナカンの側が自らを他の華人と区別するようになったのは、中国から大量の労働移民が入ってきたことが契機となっていることである。

つまり、海峡植民地となったことでこれまでになく多数の移民が流入するが、労働移民である他の華人系と自らの差異化を図ることによって植民地エリート層としての地位を獲得しようと、プラナカンは英国臣民としての立場を打ち出していくようになったと考えることができる。換言すると、海峡植民地となるはるか以前から交易に従事し、マラッカに居住していたプラナカンは商人層であったため、労働者層である華人から身を引きはがしていくかのように差異化を図ったのである。さらに言えば、裕福なエリート層となっていたプラナカンは、イギリスにとって無視できる存在ではなかったどころか交易に携わる商人層として、海峡植民地の運営においても重要な役割を担うようになっていく。

## 2 追放令と文化の領域

プラナカンは、現地に同化した存在として、いわば文化的な特徴によってまずマレー人の側から中国生まれの新客と区別され、やがて海峡植民地時代になると植民地エリートとしての地位を確固たるものとするため、英国臣民としての立場を主張するようになった。換言するとまずは文化的特徴において他者から差異化され、あるいは自ら差異化することで主体を構築したプラナカンは、植民地政策の変化によって政治的な立場での差異化を図る必要性に迫られた。つまりプラナカンという主体は、海峡植民地の誕生によって出現したということができる。

シンガポールでは労働移民が激増したことにより人口も増大し、1824年には

総人口1万700人でマレー系が60パーセントであったのが、1901年には総人口22万人、1931年には55万人を超え、うち華人系が75パーセント、マレー系は12パーセント、インド系9パーセントと今日のシンガポールと同様のエスニック・グループ別の人口構成となった<sup>15</sup>。当初、華人系のほとんどは貧しい労働者で、契約期間が終了すれば中国へ帰国する「華僑」であったが、しだいに定住する者も増えていった。やがてマジョリティである華人系は、福建や広東など出生地ごとに「帮（pang：パン）」と呼ばれるネットワークとその法人組織である「会館（huey kuan）」を形成し、同郷人どうしで社会的・経済的な相互協力体制を築いていった。

いっぽうプラナカンは華人系人口の15パーセントを超えることはなかったとされ<sup>16</sup>、数の上では少数派であった。しかし英語教育、高等教育を受け植民地政府の事務職、医師、弁護士、エンジニアなどの職業に就いており、中流以上の階級に属する者が多かった<sup>17</sup>。やがて華人系も財力をつけ帮が力を持つようになると、プラナカンは帮に対抗し自らの地位や植民地政府との深いつながりを維持するため、1900年に海峡華人英国臣民協会（Straits Chinese British Association: SCBA）を設立したといわれている。

19世紀に入り、移民が大幅に増加する中、プラナカンは中国生まれの華人と自らを差異化することで海峡植民地におけるエリート層としての地位を確固たるものにしていくが、さらにそれを推し進めることとなる出来事が生じた。それが、イギリス植民地政府が1880年代末に実施した「追放令（Banishment Ordinance）」の発布である。追放令は、出生による英国籍保持者と帰化による者とを区別し、後者は外国籍保持者と同等に扱われるという法律である<sup>18</sup>。当初は治安維持法令の一条項であったのが、1888年には独立した「追放令」として発布された。この時点では、帰化による英国臣民は海峡植民地からの追放の対象にされる恐れがあったが、生まれながらの英国臣民である海峡華人は追放を免れる立場にあった。しかし1899年8月の改定によって、海峡華人は生まれながらに英国臣民ではない人々と同じ立場に突如置かれることとなり、富や権力の喪失どころか海峡植民地から追放され生活のすべてを失う危機に直面する恐れが生じたのである。

追放令という植民地支配による暴力が顕在化する中、プラナカンはシンガポール社会においてマジョリティであった中国生まれの華人と自らを区別し、英国臣民という立場を強く主張するようになっていった。逆に、植民者の視点から見ると、プラナカンは「イギリス領で出生しても他の外国勢力からその国の臣民であると認識されているような人々」<sup>19</sup>であり、海峡華人にも新客と同様に中国籍が与えられていた<sup>20</sup>ことから、警戒すべき対象であったのである。追放令はプラナ

カン性ゆえに受けたといえる植民地支配による暴力であり、植民地政府にとってプラナカンとは現地に根付いた存在でありながら中国という外の世界ともネットワークを持つ、ある意味危険な存在であると見なされたことに起因していると考えられる。実際に中国とのつながりをもとに、プラナカンの政治的な立場が植民地政府に疑念を抱かせる事態も生じていた。中国における自然災害と満州事変による犠牲者の救援活動において、実際に寄付をおこなったプラナカンも多かったということ、そして華語や中国文学、歴史への関心が高い者も多かったことなどがそうである。プラナカンのこうした行動は、中国に対して政治的に忠誠心を抱いているという印象を植民地政府に与えてしまうこととなった<sup>21</sup>。そこでプラナカンは「マラヤにおける自らの政治的立場を危険にさらさないようにするために、中国的なものに対する文化的な関心には、政治的な意図はない、ということを繰り返し強調した」<sup>22</sup>のである。チュア・アイリンは、「海峡華人にとって、中国的なものに対する文化的関心と大英帝国への愛国心とは矛盾するものではなく、中・英両方に忠誠心を抱くことは可能である」と考えられていたと述べている<sup>23</sup>。

このように、プラナカンは中国籍、英国籍と二重国籍を保持しており、SCBAのメンバーとして親英派をアピールしていたにもかかわらず、中国への救済活動にもかかわらず中国にも忠誠心を抱いていると見られてしまうことになったのである。プラナカンにとってみれば文化的関心と政治的忠誠心は別ものだと考えていたにしても、シンガポールが政治的な緊張状態にある時には誤解されてしまう、あるいはプラナカンが両義的な面を内包しているがゆえにゆらぎが生じ、自らの立場を主張せざるを得ない状況に置かれてしまうことになった。つまりは、植民地政府からの弾圧を避けるために、中国への支援はあくまでも文化的な活動として行ったものであると言いつ張ったのである。

SCBAによってシンガポールのプラナカンは結束し、英国臣民としての立場も固めていくと同時に、植民地政府との関係も深まっていった。そしてエリート層であるプラナカンの豊富な財力に裏打ちされた、絢爛豪華な文化も花開いていく。たとえば12日間にもわたる盛大なプラナカンスタイルの結婚式、ニョニヤたちが身にまとう繊細な刺繍が施されたクバヤに、思い思いの模様や色使いが美しいビーズ細工、手の込んだニョニヤ料理など、1930年代まではプラナカン文化の黄金時代ともいわれた<sup>24</sup>。

まとめると、中国大陸からの労働移民の増加を背景に、プラナカンはまずは文化的な特徴でマレー人の側から差異化された。その後、プラナカンは新客とは違い裕福であり、二重国籍を持っていたことによって植民地支配者側から警戒され、追放令が海峡華人にも適用されることとなる。プラナカン側は、こうした植民地支配の暴力に際して、英国臣民という政治的な立場を主張することで新客との差

異化を図った。それは、19世紀後半から20世紀前半のシンガポールにおいて、プラナカン性が文化的なものだけではなく政治性を帯びたものとして立ち現れるようになった時期であった。つまりプラナカンは、追放令の改定によって新客と同様に被植民者扱いされる可能性が出てきたため、英国臣民という立場を主張することで海峡植民地政府に政治的忠誠を尽くし、自らのプラナカン性を文化の領域に押し込めるようになっていったのである。

### III 再構築されるプラナカン

#### 1 脱植民地化と不可視化

本章では、太平洋戦争、シンガポールの独立期においてプラナカン性が抑圧され、1980年代後半からプラナカン自らが共同体意識を高めるようになり、再びシンガポール社会で存在感を示していくようになるプロセスを論じていく。

前章で述べたように、海峡植民地となったシンガポールに大量の労働移民が流入する中、プラナカンは自らを労働移民である他の華人系と差異化して、植民地エリートとなっていった。その過程で、植民地権力による追放令から自らを守るため英国臣民であるという立場を主張する必要に迫られ、海峡華人英国臣民協会(SCBA)を設立した。SCBAによってシンガポールのプラナカンは結束し、植民地政府との関係も深め、豊富な財力に裏打ちされた独自の文化も1930年代に爛熟した。しかし太平洋戦争勃発後、日本軍占領時代にはプラナカンは他の華人系とひとくくりにされて扱われることになる。

シンガポールでは1942年2月15日から3年8カ月におよぶ日本軍政が敷かれた。日本軍は1931年の満州侵略開始後、中国側の抵抗に苦しみ、いっぽうで東南アジアの華僑・華人が中国救済のための募金活動などを幅広く展開していたことから、華僑・華人系に対してもっとも残酷な行動をとった。シンガポールにおいては華僑・華人の「粛清」を行い、さらに軍事費の一部を賄うため「5000万海峡ドル献金」を華僑・華人に強制したのである<sup>25</sup>。ここにおいてプラナカンは、日本軍からは他の華人系と区別されることなく被植民者として扱われることとなっただけでなく、英語を話すことからイギリス軍の協力者とみなされることとなった<sup>26</sup>。日本軍統治時代に粛清されたプラナカンは多く、さらに強制献金によりこれまでの蓄財を手放さざるを得なかった者はかなりの数にのぼり、裕福だった生活は激変した。プラナカンは、植民地支配においても日本軍占領期においても、プラナカン性ゆえに絶えず警戒される存在だったのである。

戦争が終わり、日本軍が撤退するとシンガポールにはイギリス軍が戻った。イ

ギリスは1948年2月にマレー半島9つの州とマラッカ、ペナンを合わせた「マラヤ連合」(現在のマレーシア)を発足させ、シンガポールのみ切り離して直轄植民地にするとした<sup>27</sup>。同年、イギリスは植民地運営を円滑に進めていくため、総督の諮問機関であるシンガポール立法評議会に民選議員を加えるとした<sup>28</sup>。その選挙に向けてSCBAはシンガポール進歩党を結成した。シンガポール進歩党はメンバーを海峡華人以外の人々にも広げたが<sup>29</sup>、中国生まれの中国人に市民権を付与することに反対していたこと、植民地政府に近いため保守派とみなされたことなどから、大衆の支持を得ることはできなかった。

これに対し、戦後シンガポールやマレーシアからイギリスに留学していた海峡華人で、英語教育を受けた若手のリー・クアンユー(のちシンガポール初代首相)らが中心となり、1954年1月に人民行動党(People's Action Party: PAP)が結成された<sup>30</sup>。PAPは進歩党と違い、英語派のエリートと華語派エリートが協力して結成し、創立メンバーには親英派のみならず共産系の労働組合活動家なども顔を揃えていた。1957年にはマレーシアがイギリスから独立、1958年にシンガポールは自治州となり自治権が付与され、1959年には総選挙が初めて行われた<sup>31</sup>。PAPはマラヤ連邦への統合によって植民地から独立することなどを掲げ、自治権獲得に向けた1959年の選挙において圧勝、今日まで政権与党として君臨している。

話をSCBAに戻そう。SCBA会長のオンは、1948年の選挙で進歩党が支持を得られなかったことから、ババら英語派華人だけでなくすべての海峡生まれの華人が団結すべきであると語り、さらに1948年の時とは情勢が大きく変化しておりSCBAは政治にかかわるべきではないという意見が組織内でも高くなっていると述べている<sup>32</sup>。結局SCBAは、候補者を出さず、政治には参加しなかったのである。

PAPが圧勝した1959年は、SCBAという組織と、そのメンバーであるプラナカンにとって大きな転換点となった。プラナカンはイギリス植民地時代、SCBAを組織し植民地政府の恩恵を受け、特権階級のような存在であったが、それゆえPAP政権になってからはすべてが一変することになってしまったのである。PAPはシンガポールで大多数を占める華語派華人の支持を得るため、親英的で英語教育を受けたSCBAメンバーのプラナカンに恩恵を与えることをしなかった。PAPの創設メンバーらも英語教育を受けたプラナカンであったにもかかわらず、である。多くのババ、そしてニョニヤにとって、英語派、親英といった意識は内在化されていたことであり、PAP政権になったことで政治的のみならず文化的にも自らの存在価値が貶められてしまったと感じることになったのである<sup>33</sup>。リーを筆頭とするPAPの姿勢に対し、プラナカンである地方議員からは、

いまのマラヤの土台をつくったのはプラナカンであり、現地生まれという意味においてプラナカンもマラヤ人 (Malayan) も変わりなく、プラナカンも新しい国づくりのための政治に参加させるべきだとする意見も出されていた<sup>34</sup>。しかし PAP の勢いは止まらず、SCBA は政治とは無関係の組織として再出発すべく、組織名を 1964 年に「シンガポール華人プラナカン協会 (Singapore Chinese Peranakan Association)」と改称し、1966 年には「プラナカン協会 (the Peranakan Association)」と改めた。組織の目的も、シンガポール共和国の利益のため、また「人種間 ('inter-racial') の調和」や共通のナショナル・アイデンティティの創出、といったことを強調するようになった<sup>35</sup>。

このように 1959 年以降、プラナカンは政治の表舞台からは降りることとなり、シンガポールが独立して国民国家になるというモーメントにおいては、端に置かれた見えない存在となっていく。日本軍政時代、プラナカンはマジョリティの華人とともに被植民者として扱われたが、脱植民地化、そして独立という契機において華人が解放されていくいっぽうで、プラナカンはむしろ不可視化されていったのである。

## 2 文化として一主体の再構築

プラナカンはシンガポールにおいて「政治的に死んだ」<sup>36</sup> 状態となり、社会において注目されることもなく、SCBA からのちに改称したシンガポール・プラナカン協会の活動も表立ったものはなかった。しかし 1980 年代後半になると、シンガポールと、マレーシアのマラッカ、ペナンの 3 地域のプラナカン協会が再び密接にかかわるようになり、ともに文化的な活動に積極的に取り組むようになっていく。

そのきっかけとなったのが、1988 年にペナンで初めて開催された「ババ・コンベンション (The Baba Convention)」<sup>37</sup> である。これはシンガポールとマラッカ、ペナンのプラナカン協会の会員が一堂に会するというイベントで、初回が大盛況だったことから<sup>38</sup> 会場を 3 地域持ち回りで毎年行われている。さらに、ババ・コンベンションの開催に合わせて 1991 年からは運営委員会発行のニュースレター「スアラ・ババ (Suara Baba)」<sup>39</sup> が年 1 回発行されるようになった。創刊号での記事で編集長は、毎年盛大に開催されるようになったババ・コンベンションについて「ニョニャ料理を囲みながら集うだけではなく、これからは共同体を維持し、未来を描くためにともに考え、議論する場にしていきたい」<sup>40</sup> と述べている。また編集長は同記事において、ババ・ニョニャはこれまで過去の栄光にしがみつしがちであり、将来のことを考えず、政治にも積極的に参加せず、いわば国家の成長や発展においては眠れるパートナーであった<sup>41</sup> と述べたうえで、読者

である各協会の会員へ呼びかけるようにして次のように語っている。

私たちはここからどこへ行くのか、どの方向へ大きく一步踏み出すべきか、問いかける時がおそらくきたのだ。共同体として発展していくためには、まず、他の共同体へインパクトを与えなければならないということは疑いの余地がないことである。<sup>42</sup>

そしてこの「スアラ・ババ」の創刊は、このような状況を打破しようと呼びかける初めての試みであると述べている。また同誌創刊号では、前年の1990年にマラッカで開催されたババ・コンベンションにてマラヤ大学のタン・チーベン（肩書きは当時）が行った発表を紹介する記事「ババは共同体として生き残れるか？(Will the Baba survive as a community?)」や、他のスピーカーによる発表をまとめて紹介する記事「不朽のババ文化 (Immortalising the Baba culture)」など、文化やアイデンティティについて議論した記事が掲載されている。これらの議論についてはここでは詳述しないが、1988年にババ・コンベンションが初めて開催されたのを機に、シンガポール、マラッカ、ペナンのプラナカンたちが、プラナカン（あるいはババ・ニョニャ）というひとつの共同体意識を持っていることを再確認し、「スアラ・ババ」というニュースレターを発行することでアイデンティティや文化、共同体について議論する場をつくり出したといえる。また、ニュースレターの創刊に至った時期というのは、プラナカンにとって自らのアイデンティティやプラナカンという共同体的なもの存亡について考えさせられるような状況にあり、そういったことをじっくり議論できる時期にきていたといえるのかもしれない。そして、それらはシンガポールやマレーシアといった国家によって閉じられた世界の中だけで議論するものではなく、国境を越えて取り組むべきものとしてプラナカンたちに捉えられていることに着目しておきたい。

次に、シンガポール・プラナカン協会が活動を活発化していくようになるまでの経緯を見ていこう。シンガポール・プラナカン協会は1992年、SCBA時代からの会長・副会長が変わり、リーダー層が大きく入れ替わった。副会長に選出されたデビッド・オンは新聞のインタビューにおいて、新リーダー層はプラナカン文化の保存や推進に積極的に取り組み、もっと外向きのアプローチをとっていくと語っている<sup>43</sup>。これまで、同協会の活動といえば月例のランチ・ミーティングや年1回のダンスパーティーを開催することぐらいであった。1988年以降ババ・コンベンションが開催されるようになってからは、その参加やあるいは開催地となった場合にホストを務めることも加わっている<sup>44</sup>。また同記事において彼は、このまま何もしなければプラナカン文化はあと1～2世代で消えてしまうであ

ろうと述べている<sup>45</sup>。

このように、プラナカン文化が消滅しかかっているという危機感が協会内部から発信されるようになったこと、その要因のひとつに他の華人系との婚姻が進んだことが挙げられていること、先述したように「共同体として発展していくためには、まず他の共同体へインパクトを与えなければならない」と呼びかけるように語られたことは、1990年代に入って顕著になったことである。タンは上記の記事において、「ババは華人社会にもマレー社会にも入ることができるが、人種共同体的ではないアプローチをとることができる」<sup>46</sup>と語り、ババは華人系とマレー系の間架け橋であるという言説を例に出しながら、ネーション・ビルディングにおいて人種共同体的なアプローチをとるマレーシア社会で、ババという共同体が果たすことのできる役割について述べている。また、1991年にペナンで開催された第4回ババ・コンベンションでマレーシアのガファール副首相（当時）は、ババ・ニョニヤ共同体はマレー系と華人系の文化をつなぐ役割を再開すべきだと提案している。さらにガファールは「マラッカ、ペナン、シンガポールの華人が長年にわたってローカル文化を受け入れ、自らを同化することができたという事は、（この地域における）緊張関係を和らげてきた」と述べ、「センシティブで情勢が不安定な複合社会において、ババ・ニョニヤ文化は間接的に衝撃を和らげてきた」と語っている<sup>47</sup>。

これらの語りからは、シンガポールとマレーシアにおいてプラナカン（ババ・ニョニヤ）は華人社会とマレー社会という両者を媒介することができる存在として位置づけられており、当時、特にマレーシアにおいて懸念されていた「人種共同体的な」緊張関係を和らげる役割に対する期待が高まっていたことがうかがえる。そしてプラナカン文化こそが、その緩衝剂的な役割を象徴しているといえるのではないだろうか。

プラナカン文化が果たすべき役割への期待が高まっていく中、シンガポール・プラナカン協会は1995年、次のようなミッションを掲げる。

プラナカン文化と伝統の保存と復興を、文化的で社会的な、そして文芸的な活動を通して行っていくこと<sup>48</sup>。

ミッションにプラナカン文化と伝統の保存と復興を掲げた背景には、その消滅への危機感のほか、ババ・コンベンションが定着化して幅広い議論がなされるようになり、その重要性が再認識されるようになったこと、さらには協会の存続にかけて会員数を増やしたい、特に若い世代を取り込んでいきたいという協会幹部の思いがあったのではないかと推測される。ミッションが掲載された号に先立ち、1995年9

月のニュースレター<sup>49</sup>で当時副会長だったリー・キップ・リーは、その年の7月に開催したディナートークイベントへの参加者がかつてないほど多かったことや、新会員数の着実な伸び、ニュースレターへの投稿数の増加などから、協会への関心が高まっていると語り、今後は会員数増加の速度を上げ、活動にかかわってもらうようにするためには若い世代の参加が必要であると述べている<sup>50</sup>。やがて1996年に会長となったリーのもと、シンガポール・プラナカン協会は文化的な活動を通してプラナカンというアイデンティティを高めることや会員同士の交流に力を入れ、ミッションに向かって大きく前進していく。

リーをはじめ、協会がその会員数を目安にしながら文化に力を入れた活動を活発化させてきたのは、2000年という大きな節目が迫ってきたことに起因すると考えられる。2000年というのは、シンガポール・プラナカン協会の前身、SCBAが創立された1900年から数えてちょうど100年にあたる。シンガポール・プラナカン協会は、SCBA創立時である1900年には、15,000人からなる権力を持った共同体のうちの約800人からスタートしたが、シンガポールの独立後急速に協会が力を失い、1994年には会員数がわずか300人あまりにまで落ち込んだ。そこからリーらの尽力により、2000年には1,500人を超えるまでになるのである<sup>51</sup>。

より多くの新会員、特に若い層を獲得するには、プラナカン文化を打ち出す活動が効果的であるというリーらの戦略はかなり成功したといえるだろう。だがここで押さえておきたいことが、もうひとつある。先述したようにプラナカン協会がかつて、政治的な活動には今後一切かかわらないと自ら宣言した。それに加えて、1996年にシンガポール・プラナカン協会が規約の修正を行った際、「プラナカン協会はいかなる政治活動を行ってはならず、資金や不動産を政治目的で使うことも許されない」という禁止事項が追加されたのだ。したがって、協会はヘリテージ・ソサエティとしての活動を活発化させてきたというのである<sup>52</sup>。

#### IV おわりにープラナカンであるということ

プラナカンは海峡植民地時代のシンガポールにおいて、中国生まれの移民と比べ現地と同化した存在として「ババ」と呼ばれ、文化的な特徴によってまずマレー人の側から区別された。やがてプラナカンは追放令という植民地暴力に直面し、英国臣民である立場を主張するようになった。英国臣民としてのプラナカンは、海峡植民地政府とのつながりを重視した「海峡華人」という語によって表象され

た。その後太平洋戦争、イギリスからの脱植民地化を経てシンガポールが独立国家となる時期においては、海峡華人であったプラナカンは「政治的に死んだ」状態となり脱政治化され、また新しい統治者からも抑圧され、自らもプラナカン性を抑圧していく。やがてシンガポールの経済成長著しい1980年代後半になると、政治的にも文化的にもプラナカン性が危機に瀕しているという意識がプラナカンの間で高まり、シンガポール、マラッカ、ペナンという3地域のプラナカン協会がともに文化によって主体の再構築を図り、共同体の存在を高めていこうと文化的活動を活発化させていく。

プラナカン文化はその後2008年にはマラッカ及びペナンが世界遺産に登録されたことで、シンガポールでも観光やメディアで頻繁に取り上げられるようになった。2008年にはプラナカンをテーマにしたTVドラマの大ヒットやプラナカン博物館のオープンなどにより、プラナカン文化はブームとなった。とくにTVドラマ「リトル・ニョニャ (The Little Nyonya: 華語では小娘惹)」の大ヒットにより、プラナカン文化への関心が一気に高まることとなった。プラナカン料理や陶磁器、サロン・クバヤやビーズシューズといった、ドラマに登場した1930年代の華やかで洗練されたプラナカン文化は視聴者を魅了した。そしてプラナカン文化は消費文化化され、プラナカンを名乗る人々が増大することにつながった。それはたとえばビーズシューズを履いてみたりすることから始まるが、背後にはシンガポリアンはみんな何らかのプラナカンといえるのではないか、ということと、プラナカンである、あるいはプラナカンと名乗ることが「かっこいい」からではないか、という見方がある<sup>53</sup>。やがてプラナカン文化はポピュラー・カルチャー化して国外へますます広がっていき、各地でプラナカン協会の設立が相次いで、プラナカンはトランスナショナルなネットワークを持つに至ったのである。

こうした展開を考えるうえで注目したいのが、「ババ」「海峡華人」「プラナカン」という語がシンガポールでどのような時期に登場しているのかということである。シンガポールの英字紙において、シンガポールが独立する1965年ごろまでは「海峡華人 (Straits Chinese)」という語が多く登場するが、その後は用いられなくなり、1980年代後半までは「ババ (Baba)」が多く、1990年ごろからは「プラナカン (Peranakan)」が上回るようになっていく<sup>54</sup>。1990年代以降というのは、グローバル・シティ化したシンガポールで外国人労働者や新移民<sup>55</sup>の増加が顕著になっていく時期であり、シンガポール社会への統合が課題となる時期でもあることから、政治的・文化的意味合いの薄い「プラナカン」という語が多く登場するようになったと考えられる。先述したように、シンガポールという国家に大きな変化が生じた時期を境にして、海峡華人という語からババ、そしてプ

ラナカン、と使用される語も変化していることがわかる。

いっぽう、プラナカンは植民地主義や国家の対抗概念として、あるいは被抑圧者としてのみ存在するというわけではない。政治的な概念のみならず文化的な概念に目を向けると、被植民者として扱われるのを避けるため海峡華人という主体を打ち出した時期に、プラナカン文化は絢爛豪華な黄金時代を迎えている。植民地時代に花開いたプラナカン文化は、1990年代以降にプラナカン自らが共同体を再構築する際の拠り所として機能し、さらに2000年代後半にプラナカン文化が消費文化化した際には、「本物の」「伝統的な」文化として絶えず遡及されるものとなった。植民地政府に忠誠を尽くすことを示す「海峡華人」という主体が登場すると同時にプラナカン文化が爛熟していくという、いわば政治的忠誠と文化の領域がセットになった場所が生まれたのである。そして、シンガポールがグローバル・シティとなり、再び新移民が増加する中で、プラナカン文化はブームを迎えている。

かつての海峡植民地時代、そして日本軍占領期を経て独立する際、政治的な主体としてのプラナカンは不可視化されていったが、そこにおさまりきらないものが文化の領域において抱えこまれるようになった。つまり、植民地主義や国民国家の政治においてはつねに端に置かれてしまう存在のプラナカンは、そこにおいては抱えこめないものを、文化の領域で抱えこんでいくことを選んだのではないか。先述したように、プラナカン文化がブームとなり注目を集めるようになったのは、シンガポールがグローバル・シティとなってからだが、それは新移民が大量に増加したことに起因している。そこには、海峡植民地時代においてもそうであったように、文化の領域の根底には植民地主義の痕跡が見出せるのではないだろうか。そしてそれは、つねに脱領域的な存在であるプラナカンだからこそ描き出すことのできる、植民地主義の新たな歴史なのかもしれない。

## 注

- 1 奥村みさ『文化資本としてのエスニシティー—シンガポールにおける文化的アイデンティティの模索—』(国際書院、2009)、40。  
 ただしインド系とマレー系の婚姻による子孫も「チッティー・プラナカン (Chitty Peranakan)」と称されるなど、プラナカン、イコール華人系というわけではない。シンガポールやマレーシアにおいてはプラナカンといえば「プラナカン・チャイニーズ (Peranakan Chinese)」を指すことが多いが、それは華人系のプラナカンが数の上で多いことによるものである。
- 2 サスキア・サッセン (鈴木淑美訳)「グローバルとナショナルの間—経済学的グローバリゼーションの時空間性」『現代思想』5月号 (2003)、第31巻第6号、65。  
 シンガポールは1990年代以降、ハイテク、研究開発、金融、物流拠点あるいは結節点となることにより、今日に至るまで外資系企業にとって魅力的な存在であり続けている。金融拠点となったシンガポールには人々や情報、資本が集まり、それは他の国際金融拠点との間を循環することになる。つまり、「グローバル・シティ」となり、つねに外国人労働者や新移民が流入することにつながっていく。
- 3 Leo Suryadinata, "Introduction", in *Peranakan Chinese in a Globalizing Southeast Asia* (Singapore: Chinese Heritage Centre, 2010), 2; Henderson J. "Ethnic Heritage as a Tourist Attraction: the Peranakans of Singapore" *International Journal of Heritage Studies*, Vol.9, No.1 (2003): 30-31.
- 4 田中恭子『国家と移民—東南アジア華人世界の変容』(名古屋大学出版会、2002)、23.
- 5 Leo Suryadinata, *Understanding the Ethnic Chinese in Southeast Asia* (Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 2007), 112-113. フィリピンではプラナカンという語ではなくメスティソ (mestizo) という語が使われており、また華人系というよりフィリピン人としてのアイデンティティを持っているといわれる。これに対し宮原暁は、今日的意味における中国系メスティソは中国系移民の下位カテゴリーとされることが多いとし、「このようなメスティソの両義性、境界性からは、チャイニーズ・ディアスポラへの合流といった再中国化の動きも、逆に居住地社会への統合といった現地化、クレオール化、あるいはプラナカン化の動きもどちらも生じ得る」と論じている (宮原暁「フィリピン諸島における今日的な意味での中国系メスティソのトポロジー」『パネル2「国民であること・華人であること—20世紀東南アジアにおける秩序構築とプラナカン性」』東南アジア学会第83回研究大会発表資料 (2010))
- 6 Tan Chee Beng, *Chinese Peranakan Heritage in Malaysia and Singapore* (Kuala Lumpur: Penerbit Fajar Bakti Sdn. Bhd., 1993), 32; 田中恭子 前掲書、23-26; 奥村みさ 前掲書、304-305.
- 7 田中恭子 前掲書、19-24; 田村慶子『シンガポールの国家建設—ナショナリズム、エスニシティ、ジェンダー』(明石書店、2000)、36.
- 8 田中恭子 前掲書、24.
- 9 Tan Chee Beng, *op. cit.*, 22; 田中恭子 前掲書、25-26.
- 10 Tan Chee Beng, *op. cit.*, 22.
- 11 Ibid.
- 12 Leo Suryadinata, "Introduction", in *Peranakan Chinese in a Globalizing Southeast Asia*, (Singapore: Chinese Heritage Centre, 2010), 4.
- 13 Ibid.
- 14 Tan Chee Beng, *op. cit.*, 21-22.
- 15 田村慶子 前掲書、30-34.
- 16 Leo Suryadinata, *Understanding the Ethnic Chinese in Southeast Asia* (Singapore: Institute of

- Southeast Asian Studies, 2007)、117. プラナカンは華人系の人口の中に数えられているとしている。
- 17 岩崎育夫『リー・クアンユー—西洋とアジアのはざままで 現代アジアの肖像 15』(岩波書店、1996)、24-28 ; 田中恭子 前掲書、31.
- 18 篠崎香織「シンガポールの海峽華人と『追放令』—植民地秩序の構築と現地コミュニティの対応に関する一考察—」『東南アジア—歴史と文化—』No.30 (2001)、80-81.
- 19 1899年5月に、植民地総督であったミツツェルが植民地省大臣に宛てた書簡で提案したものの。篠崎香織 前掲論文、82.
- 20 Chua Ai Lin, *Negotiating National Identity: The English-Speaking Domiciled Communities in Singapore, 1930-1941*, (MA Thesis, National University of Singapore, 2001), 59-60.
- 21 Chua Ai Lin, *op. cit.*, 62.
- 22 Ibid. 引用者訳。
- 23 Chua Ai Lin, *op. cit.*, 63. 引用者訳。
- 24 Jurgen Rudolph, *Reconstructing Identities: A Social History of the Babas in Singapore* (Aldershot: Ashgate, 1998), 226-252.
- 25 田村慶子 前掲書、49 ; 岩崎育夫 前掲書、38-39.
- 26 岩崎育夫 前掲書、38-41.
- 27 岩崎育夫 前掲書、55 ; 田村慶子 前掲書、57-59.
- 28 田村慶子 前掲書、61.
- 29 SCBA も 1950年代からは会員資格を、英語を話せず華語やマレー語しか話せない海峽生まれの華人、そして女性にも広げている。
- 30 田村慶子 前掲書、83-84.
- 31 岩崎育夫 前掲書、57.
- 32 “The Babas Must Decide: Will We Go into Politics?”, *The Straits Times*, 27 May 1955, 8.
- 33 Rudolph, *op. cit.*, 202.
- 34 Ibid.
- 35 Ibid.
- 36 Lee Kip Lee, “Going Strong – A Rejuvenated Association Looks Forward to the New Millennium”, *The Peranakan* (October - December 1999), 2.
- 37 「ババ・ニョニャコンベンション (The Baba Nyonya Convention)」と称することもある。
- 38 Dato' Khor Cheang Kee, “Where Do We Go From Here?”, *Suara Baba* (August 1991), 2.
- 39 マラッカ、ペナン、シンガポールのプラナカン協会、グヌン・サヤン協会の4組織が中心となって発行。“For internal circulation only”と記載されている。
- 40 Dato' Khor Cheang Kee, *op. cit.*, 1. 引用者訳。
- 41 Ibid. 引用者訳。
- 42 Ibid. 引用者訳。
- 43 Lim Teng Joon, “New Peranakan Leaders Spell Out Plans”, *The Straits Times*, 28 June 1992, 20.
- 44 Ibid.
- 45 Rudolph, *op. cit.*, 253-255. プラナカン文化が消滅しかかっているという言説のひとつの要因として、ババ共同体以外の華人系との婚姻が挙げられている。とくに日本軍占領時代以降インターマリッジが著しく増加したといわれる。
- 46 Tan Chee Beng, “Will the Baba Survive as a Community?”, *Suara Baba* (August 1991), 6. 引用者訳。
- 47 “Babas Urged to Resume Role of Cultural Bridge”, *The Straits Times*, 7 December 1991, 18. 引用者訳。

- 48 “Mission Statement”, *The Peranakan* (December 1995), 12. 引用者訳。
- 49 シンガポール・プラナカン協会のニュースレター「ザ・プラナカン (The Peranakan)」は1994年に創刊。年4回発行。
- 50 Lee Kip Lee, “Portents of an Awakening”, *The Peranakan Association Newsletter* (September 1995), 1.
- 51 Ibid.
- 52 “Editorial”, *The Peranakan* (July - September 2000), 5.
- 53 Phin Wong, “Who Wants to be a Little Nyonya?”, *Today*, 10 January 2009, 30.
- 54 NewspaperSG (シンガポール国立図書館のウェブサイト内の、シンガポールの新聞記事検索ページ)にて、プラナカン、ババ、海峡華人でキーワード検索をかけた結果にもとづいている。詳細は安里 (2013) を参照のこと。
- 55 ここで用いている新移民という語は、1990年代以降増加が顕著となるシンガポールの永住権あるいは国籍 (市民権) を取得した人々のことを指す。

### 参考文献

#### ■日本語

- 安里陽子 2013『シンガポールにおけるアイデンティティ・ポリティクス—再構築されるプラナカン概念と文化をめぐる政治性—』同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士前期課程提出修士論文
- 岩崎育夫 1996『リー・クアンユー—西洋とアジアのはざま— 現代アジアの肖像 15』岩波書店
- 奥村みさ 2009『文化資本としてのエスニシティ—シンガポールにおける文化的アイデンティティの模索』国際書院
- 北村由美 2011「ポスト・スハルト期インドネシアの華人出版物にみられる自己イメージ」『分科会 2「ポスト・スハルト期のインドネシア華人をめぐる」』日本華僑華人学会年次大会発表資料
- サスキア・サッセン (鈴木淑美訳) 2003「グローバルとナショナルの間—経済学的グローバリゼーションの時空間性」『現代思想』5月号、第31巻第6号、58-68
- 篠崎香織 2001「シンガポールの海峡華人と『追放令』—植民地秩序の構築と現地コミュニティの対応に関する一考察—」『東南アジア—歴史と文化—』No.30、72-97
- 田中恭子 2002『国家と移民—東南アジア華人世界の変容』名古屋大学出版会
- 田村慶子 2000『シンガポールの国家建設—ナショナリズム、エスニシティ、ジェンダー』明石書店
- 田村慶子 (編著) 2008『シンガポールを知るための62章 [第2版]』明石書店
- 宮原暁 2010「フィリピン諸島における今日的な意味での中国系メスティソのトポロジー」『パネル 2「国民であること・華人であること—20世紀東南アジアにおける秩序構築とプラナカン性—』東南アジア学会第83回研究大会発表資料

#### ■英語

- Chua Ai Lin. 2001 *Negotiating National Identity: The English-Speaking Domiciled Communities in Singapore, 1930-1941*, MA Thesis, National University of Singapore
- Henderson, J. 2003 “Ethnic Heritage as a Tourist Attraction: the Peranakans of Singapore”, *International Journal of Heritage Studies*, Vol. 9, No.1, 27-44
- Rudolph, Jurgen. 1998 *Reconstructing Identities: A Social History of the Babas in Singapore*, Aldershot: Ashgate

Suryadinata, Leo. 2007 *Understanding the Ethnic Chinese in Southeast Asia*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies

Suryadinata, Leo. 2010 "Introduction", in Leo Suryadinata (ed.) *Peranakan Chinese in a Globalizing Southeast Asia*, Singapore: Chinese Heritage Centre, 1-13

Tan Chee Beng. 1993 *Chinese Peranakan Heritage in Malaysia and Singapore*, Kuala Lumpur: Penerbit Fajar Bakti Sdn. Bhd.

■ 定期刊行物・メディア

*Suara Baba* (年刊会報)、Penang: The Peranakan Associations in Malaysia and Singapore

*The Peranakan* (季刊会報)、Singapore: The Peranakan Association Singapore

*The Straits Times* (日刊紙)、Singapore

*Today* (日刊紙)、Singapore

■ ウェブサイト

NewspapersSG (<http://newspapers.nl.sg/>)

Abstract

## Reconstruction of Peranakan Concept and History in Singapore --- Who is *Peranakan*?

Yoko ASATO

The purpose of the study is to discuss how the *Peranakan*, originally connoted as with ethnic hybrid culture, included polysemous meanings is reconstructed in the process of nation building and economic development of Singapore. The hybridity of the concept, widely regarded as given is variable accordingly to the increase in Chinese population and policy of British colonial government. However, the concept is not the monolithic one. *Peranakans* came to claim oneself as a British subject under the colonial rules to protect and keep their subjective agent in the sphere of culture. During Japanese occupation and independence from British colonialization, *Peranakans* had been invisible politically.

After the silence, *Peranakans* started to emerge in the society again by strengthening community ties across the Straits of Malacca. Singapore experienced *Peranakan* culture boom after 1990s due to tourism policy, opening up of *Peranakan* Museum as well as the registration of Malacca and George Town, Penang as World Heritage in 2008. *Peranakan* culture became consumption culture and started to gain cohesiveness due to its popularity and some started to identify themselves as *Peranakans*. The popularity formed several magnet of *Peranakan* culture beyond Singapore such as Penang and Malacca with transnational networks.

From the era of Straits Settlements up to the present, *Peranakans* never be as the major political actor in Singapore. Because of the ambiguous and polysemous concept, *Peranakans* are always on the edge of society. Although the concept of *Peranakan* seems to be always located in cultural sphere, not political one, both spheres are get entangled by *Peranakans* themselves. It can be said that the agency of *Peranakan* is always constructed performatively.

